この国に生まれてよかった この時代に生きてよかった

第９回

天国の先輩からも大きな拍手

日本障害フォーラムの設立

藤井克徳

日本障害者協議会代表・きょうされん専務理事

ふじい　かつのり／1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第２作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害フォーラム（JDF）や、日本障害者協議会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。

■珍しい存在だった

「日本の障害分野で世界に向けて胸を張れるものがありますか」と尋ねられたらどうでしょう。思わず頭を抱え込んでしまいます。そんななかにあって、鈍い輝きを放っているものがあります。それは、日本障害フォーラムの存在です。ＪＤＦという響きの方が馴染みがあるかも知れませんが、これは日本障害フォーラムの略称であり、通称です。今回は、このＪＤＦにたっぷりと焦点を当ててみたいと思います。

ＪＤＦを正確にとらえることは、日本の障害団体の今を知ることにつながります。どんなふうにして誕生したのか、ＪＤＦならではの成果などについても紹介しましょう。そこでの活動や考え方、手法は、これからの地域での運動にも役立つはずです。

まず紹介したいのは、珍しい存在だということです。二つの点で明確です。一つ目は、国際的にみて稀な存在です。欧米でも、私たちのアジア太平洋エリアの国々でも、いずれも障害に関連した団体はいくつもあります。意外と思われるかも知れませんが、障害種別や分野別（教育や労働、まちづくりなど）に分かれたままで、主要団体による実質的で恒常的な連携組織は見当たりません。

二つ目は、国内でも稀だということです。平和（非核・反核）や、労働組合、環境保全、消費者など分野別にさまざまな市民団体があります。こちらもそれぞれの分野の中で分かれたままで、立場や考え方の違いなどで、正式な「一つの土俵」は持ち得ていません。

全国規模で、障害種別を越えて大同団結することは、先輩たちの積年の夢でした。かつては障害種別間でいがみ合い、反目することさえ珍しくありませんでした。ＪＤＦの誕生に、天国の先輩たちも拍手を送ってくれているに違いありません。

■ゆるやかな組織体として２００４年10月に設立

ＪＤＦの設立は、２００４年10月31日でした。新霞が関ビルの全社協ホールが会場になりました。準備に費やした期間は一年半余で、組織の基本性格や具体的な活動内容、財政や役員体制などについて、議論に議論を重ねました。議論の結果は、定款（基本規則）や初期段階の役員や事務局体制に反映されていきました。

設立段階で集った団体は11団体でした（うち２団体はオブザーバー、具体的な団体名は文末を参照）。いくつかは名称が変更になっていますが、実質的には変わっていません。気づかれたかと思いますが、基本的には日本国内の主な障害当事者団体ということになります。色合いが異なるのは、全国社会福祉協議会と日本障害者リハビリテーション協会ですが、全社協はさまざまな障害関連団体の事務局を担い、リハ協は障害分野の国際的な窓口になっていることから、一緒にフォーラムをつくっていくことになりました。

準備段階で議論になった事柄を、二点紹介しましょう。とても重要なことでした。一点目は、団体の性格についてで、ナショナルセンターの意味をもたせるかどうかでした。障害分野でのナショナルセンターとなると、日本の障害分野を代表し、結束力の強い組織体を意味します。議論の結果、将来は別として、ナショナルセンターのイメージではなく、構成団体のそれぞれの理念や活動を尊重することを前提とした「緩やかな組織体」とすることで落ち着きました。二点目は、財政基盤の確立です。自主性や独立性を実質化させるために、行政の補助金をあてにしたり、企業などからの寄付金依存はやめようということにしました。かなりのハードルでしたが、一団体の年間会費を50万円と定めました。現在は13団体（うち２団体はオブザーバー）で、会費の年額は変わっていません。

▲2004年10月31日に開催されたJDF設立記念セミナーの様子

■２つのキャラバン企画で信頼関係が

設立までの準備期間を一年半余と述べましたが、これは下ごしらえができた以降の言わば総仕上げの期間という意味です。ここにこぎ着けるまでに、いくつもの大きな曲折がありました。大同団結の最初の試みは、国際障害者年（１９８１年）をきっかけとして結成された国際障害者年日本推進協議会（現在のＮＰＯ法人日本障害者協議会、ＪＤ）の誕生時に遡ります。厚生省の元事務次官（太宰邦博さん）を代表に迎え、国際障害者年を追い風に、悲願の成就かと思った矢先に状況が一転しました。準備会から席を立つ団体が出てしまいました。結局、国際障害者年日本推進協議会の結成をもって、大同団結の第一段階としたのです。

関係者のショックは甚大でした。でもあきらめませんでした。次なるターゲットを「国連・障害者の十年」（１９８３年～１９９２年）の最終年に置きました。今度はいきなりカッチリとした組織体づくりというのではな